

歩兵砲満州より湖南へ

佐賀県 吉田 政雄

私は昭和十七年一月十日現役兵として久留米の一四八連隊補充隊に入隊、三か月間の教育を受けた後、四月十二日門司出港、釜山經由、満州の城子溝（東安省密山県）に到着、歩兵第四八連隊に編入され、歩兵砲隊として馬の手入れをする一兵士となりました。

馬は人間を見ることができ、目をギロリと開いて、馴れた人には従順でいうことを聞くが、馬に馴れていない兵士の言うことは聞かず、押ししても引いても動こうとせず、下手すると蹴ったり踏んだりします。

馬のえさにする草を同年兵と刈りにいっても、商家出の私は草刈りしたことがないので、刈った草をかき集める役に廻ります。冬季演習の時は河の水をツルハシで割り、冷たい水を馬に飲ませます（過冷却水といって零下になっても凍っていません）。

馬の名前と特徴を覚えるのに苦労しました。馬部隊で馬の首に名札をつけた隊もありましたが、私の隊は名札はありません。顔の部では星、流れ星。毛の色では鹿毛、栗毛、体異毛。前後脚、四白、左一白、右一白、等各馬の特徴を覚えなければならぬので、記憶の薄い者は困りました。

毎朝の馬の運動の後は脚を洗って蹄油を塗る。馬糞を担架で出しておく、満州の空気が乾いているので、燃料としてよく馬糞を燃やした。

一人の乗馬兵が五頭の馬を操って運動させるのに較べ、一頭の馬を仲々うまく扱えぬ自分が情けなく思った。三年兵になれば自由に乗れるようになるだろうと思っていたが、三年兵になったら第十野戦補充隊に転属となり其の夢は破れた。

ソ満国境の曠野は五月になると一斉に草木が芽を出します。迎春花、鈴蘭、芍薬、百合、桔梗、最後が野菊です。九月に入れば四、五日で寒くなり霜が下ります。春は「あんず」の花が山一杯に咲きます。不思議に「あんず」の実を見ませんでした。外出は演習の時位でした。

星空を眺めて故郷を偲びました。星は内地よりも天頂に近く見えますが、後日中支、南支に転戦した時は北斗七星は地平線に近くなります。南十字星は探しましたが逐に見えませんでした。

十九年二月二十五日城子溝出發、山海関、天津、徐州（列車輸送、徒步行軍）南京に到着し、獨立歩兵第五九六大隊に転属となり第三百三十一師団（秋水兵団Ⅱ小倉達次中将）、歩兵第九六旅団（海福三千雄少将）の隷下となる。

八月三十日から始まった醜陵攻撃作戦は五個師の敵を相手の戦斗だったので相当の損害が出たらしい。二八五高地はその戦場だった。激戦が終わり警備のため山へ五人が登り、砲対鏡と電話機を持って行った。山頂まで電話線が引いてあり電話機を接続するだけにしてあった。

登って見て驚いた。戦斗のすさまじさに先づ圧倒されました。台地中央の機関銃座の周辺は空の葉莖と実弾が足の踏み場もないくらい散乱している。あるだけの力を出しつくして戦った跡が偲ばれた。敗走した敵は死体を残し、半分埋めたままのが沢山あり、夏の暑さで腐り、

蠅がものすごく発生していた。昼食を取ろうとしたら体に蠅がたかるので手で払っても追いつかず天幕をかぶり、その中で急いで食べた。死体に土を被せようとしても体力が弱ってスコップを握る力もなかった。

毎日山に登って敵状視察を続けたが、死体はいつの間にか減り、野犬が現われ死体を食ったようである。秋が深まるにつれ悪臭も消えて元の山の姿に返りました。ある日、山の中途にある廃屋に入り各人思い思いに探していた時、突然爆発の音がした。「シマッタ」という叫び声が出た。同年兵の一人が左手の親指と人差指が吹っ飛んで血だらけの左手をかざして倒れている。醜陵の野戦病院に運び込んだのだが途中の事は想い出せません。いづれ本人は内地送還になったと思いますが今一度会いたいと思っております。

やはり中支にいた頃です。三年兵になっていました。歩哨に立つのですが前の日に舎内で足踏みの臼で粳つきをやった。玄米の粳を二千回つくくと五、六升の白米が出来るのです。頼まれもしないのに自ら進んでやった。山の上で歩哨に立ったら前日の疲れが一べんに出てきま

した。寒い時でしたので山の下から手提げ火鉢を持ってきて腰を卸して温まったものですから、いつのまにか眠ってしまった。それを曹長殿に見つけられ、衛兵司令と二人がシツカリ油を絞られたことを想い出します。疲れている時は絶対に腰を卸してはいけないとやかましく言われていたんですがね。

又、こんな事もありました。歩哨に立ったんですが、其の日は絶好の天気だったもので腹這いになって銃を据えて敵を監視しているうちに眠ってしまった。幸い誰も気付かれぬうちに眼を覚ましたので助かりました。ホッと胸を撫でおろしました。

十九年十月頃の話ですが醜陵（焼物で有名な景德鎮と並び称される焼物の名産地）にいた時に食糧調達のために占領地帯から少し離れた部落に入り、食糧を集めて馬に載せて運んだ後、私は山に登り敵状監視の任に着きました。暫らくすると下から飯盒一杯に油で炒めた焼飯を持ってきた。大変美味しく食べました。間もなく腹の具合が悪くなり、全部吐き出してしまった。そのうち便所へ何回も行きピーピーの猛烈な下痢で、フクランでいた

腹がペチャンコになってしまいました。

それでも当時二十五歳の若さがありましたから知らぬ顔で下へ降りたら、全員食当たりで寝込んでしまっているのに驚いて、よく調べたら桐油であったそうです。油を鑑定して調理した中国人も中毒症状で倒れていました。

不沈駆逐艦「楨」

石川県 松井喜一

昭和十八年一月、舞鶴海兵団へ入団して二月いっぱい新兵教育、三月三日横須賀海軍通信学校（今もそのまま残って自衛隊の陸軍通信学校になっている）入校、九月卒業。その後助手として十一月まで、次の六六期生の通信演習などに参加していました。私たち六五期生は三〇〇〇人ぐらいたそうですが、後に山口県防府に学校ができて、呉と佐世保鎮守府の者は転校しました。

十一月、転属命令がきて、第一雲洋丸（山下汽船からの徴用船を改造し、砲も整備された二〇〇〇〜三〇〇〇